

公益社団法人日本語教育学会 文部科学省委託事業

「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」2018

モデルプログラム

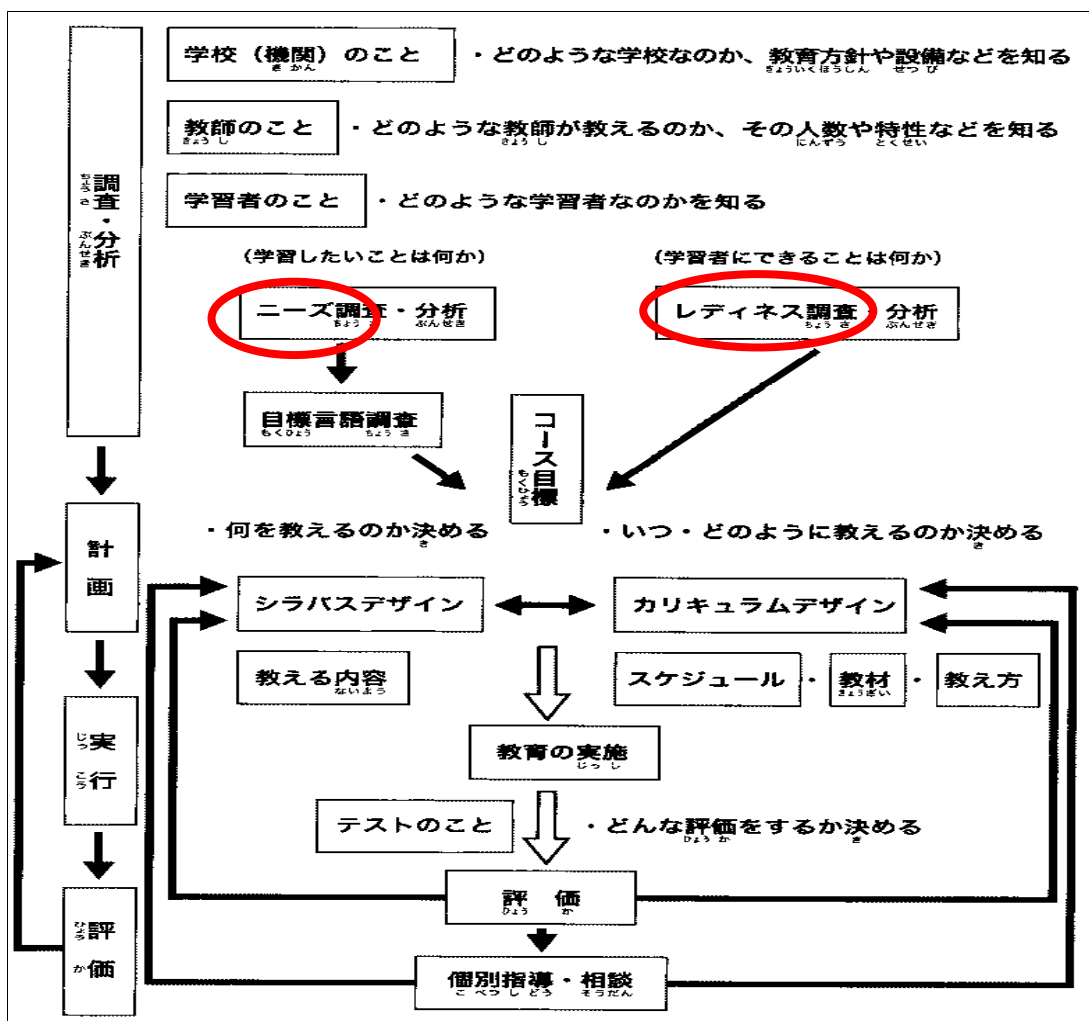
⑰日本語指導の理論と方法 ⑱個別の指導計画の立て方 に関する資料

コースデザインと言語教育の方法

和泉元千春（奈良教育大学）

第二言語／外国語を・・・
 ○何を教えるのか？ ○どのように教えるのか？ ○教師の役割は？

1. コースデザイン



『国際交流基金日本語を教授法シリーズ1 教師の役割/コースデザイン』8pより

※PDCA サイクルが重要

<外国人児童生徒を対象とした日本語教育の場合>

調査・分析 児童生徒の実態の把握

(来日年齢と滞日期间、背景の言語文化、発達段階、来日前の教科学習経験、基礎学力、日本語の力、在籍している学級での学習参加の状況、家庭の学習環境)

計画 日本語指導の目標 (3つの側面から)

A 学校・社会生活 B 学習・認知面の発達 C アイデンティティ形成・自己実現

プログラムの設計 (目標設定 長期目標 → 中期目標 → 短期目標)

「サバイバル日本語」「日本語基礎」「技能別日本語」「日本語と教科の統合学習」

「教科の補習」

評価方法の決定 (妥当性・信頼性・実用性)

- 評価の時期 ・ 形成的評価・総括的評価
- 評価基準 ・ 絶対的評価
- 目的 ・ 熟達度テスト・到達度テスト
- 評価の実践 ・ 分析的評価、全体的評価

2. 何を教えるか？

(1) コミュニケーション能力 Communicative Competence

	能力の定義	関連する技能や知識
文法能力	言語を文法的に正しく理解し使用する能力	文法、語彙、発音、文字・表記
社会言語能力	相手との関係や場面に応じて、いろいろなルールを守って言語を適切に使用する能力	相手や場面によるスピーチスタイルの選択、話題の選択、非言語行動
談話能力	談話を管理し、組み立てることができる能力	会話の開始、継続、終了のしかた、あいづちの打ち方、話題の転換や展開のしかた、発話の順番とり
戦略能力	コミュニケーションがうまくいかなかったときに、自分や相手の発話をコントロールして修復する能力	言い換え、説明、母語の使用、聞き返し

Canale Michael(1983) From communicative competence to communicative language pedagogy. In Jack C. Richard W. Schmidt (eds) *Language and Communication*. London: longman

(2) シラバス 「児童生徒の場合どうか考えた見よう」

	項目・内容の例	いい点	どんな学習者のために？	児童生徒なら？
文型シラバス	N1 は N2 です。／ N1 は N2 にあります。／これ・それ・あれ／N1 の N2 (所有)、等	文の形や規則が理解しやすい。 規則の易しいものから難しいものへ少しずつ勉強することができる	日本の大学や専門学校の受験生 将来日本語学などの勉強をする予定の人 将来中級・上級レベルまで勉強しようと考えている人	
機能シラバス	依頼する、指示する、感謝する、謝罪する、誘う、依頼を断る、誘いを断る、許可を求める、等	1 つ 1 つの文がどのような意味や目的で使われているか、常に結びつけて勉強することができる	日本で生活している人 勉強や仕事のためではなくて、日常生活に必要な日本語ができるようになりたい人 初級前半が終了してからもっと日本語を実際に使えるようになりたいと考えている人	
場面シラバス	スーパー、デパート、銀行、郵便局、美容院、レストラン、駅、病院、役所、等	ある場面で必要とされる語彙や文型をまとめて学習することができる	日本語を使用する場面がはっきりしている人（日常生活で日本語を使う人、旅行者など） 初級前半が終了してから実際の場面で日本語を使いたいと考えている人	
話題シラバス	日本の食べ物、日本の将来、学校、職業と人生、高齢化社会、予防医学、外国人労働者、等	ある話題で必要とされる語彙や文型や表現を同時に学習することができる 学習の興味のある話題を取り上げることでも動機づけになる (motivate) 文化的な学習項目を取り入れやすい	文化教育の中で「日本語」を学習する人 初級後半が終了してから、日本への興味を持ち続けながら勉強する場合 中級・上級などレベルが上になってから、特定のテーマについて話すなど、総合的に日本語が使えるようになりたい人	

<参考> 『国際交流基金日本語教授法シリーズ1 日本語教師の役割／コースデザイン』 56-57 p 他

※実際は、上記シラバスを組み合わせる人が多い（複合シラバス）

3. どのように教えるのか？（日本語教育の方法）

(1) 主な日本語教授法

教授法	特徴（考え方や理論背景など）	教室活動
文法翻訳法	<ul style="list-style-type: none"> ・文字言語を重要だと考える ・学習の目的は目標言語で書かれた文学作品が読めるようになること ・文法規則や単語の意味を暗記して、母語と目標言語の翻訳が自由にできるようになることが重要である ・外国語を理解することは、母語に対する理解を深め、知的成長にも役立つと考える 	
オーディオリンガル法	<ul style="list-style-type: none"> ・言語は本来音声であり、構造体であるから、言語の学習は、言語の構造あるいは型を学習することが大切である（構造主義言語学） ・人間や動物は、外からの刺激に対してさまざまな反応を示し、そうした中で強化された反応ほど起こりやすくやがて習慣になっていく。習慣形成のためにくり返し練習を行うことが大切である（行動主義心理学） 	パターン・プラクティス ミムMEM練習（模倣-記憶練習） ミニマルペア練習
コミュニケーション・アプローチ	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力の育成を目的とする教授法。 ・コミュニケーション能力とは、言語の形やその規則の知識だけでなく、使い方も含めた知識と運用能力を指す。 ・学習内容が重要だと考える ・学習者中心 	タスク活動、コミュニケーション・タスク ロールプレイ シミュレーション プロジェクトワーク
TPR	理解を優先し、聞いたことに全身で反応する方法を用いる。母語習得の方法をモデル化したもの。 話す準備ができるまで、学習者は話すことを強要されない。	聞いて反応する タスク・リスニング
直接法*	<ul style="list-style-type: none"> ・使われる場面や状況、実物などを示すことによって、文や語の意味を直接目標言語の形式と結びつけて理解させる ・媒介言語を使わないことが多い *単に「媒介語を使わない」ということを意味する場合もあり。	

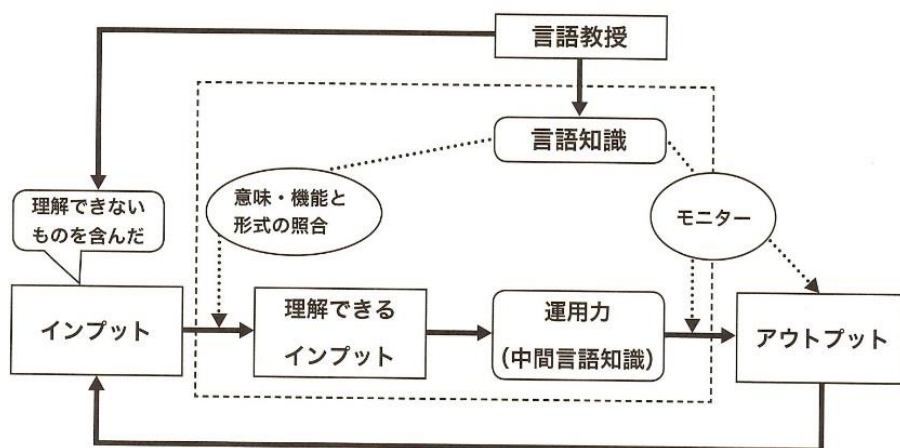
<参考>『国際交流基金日本語教授法シリーズ1 日本語教師の役割／コースデザイン』42p

(2) 授業の流れ

○第二言語習得のメカニズム

※意識的な文法の学習をすると、「言語知識」が得られる

- 「気づき」による意味・機能と形式の照合 ・アウトプットによるモニター
- ※習得は時間をかけて進んでいくもの
- 意味が感じられる学習活動の中で繰り返し指導することが重要
- 同じ学習項目にとどまって暗記を強要しない、学習者の興味や必要性和関連付ける



『国際交流基金日本語教授法シリーズ4 文法を教える』14pより

(3) 練習方法：正確さを重視した練習方法

○パターン・プラクティス

<p><反復練習> 教師が言ったことを同じように言う練習</p>	<p>T: 飲みます → S: 飲みます T: 食べます → S: 食べます</p>
<p><代入練習> 文の中の単語を入れ替えて文を言う練習 入れ替え部分が2箇所の場合もあり</p>	<p>T: 牛乳を飲みます。ジュース S: ジュースを飲みます</p>
<p><変換練習> 活用などを覚えるために、教師が与えたことばを決められた形に変えて言う練習</p>	<p>T: 飲みます → S: 飲みません T: 食べます → S: 食べません</p>
<p><拡大練習> 教師の与えたことばを不足部分を補いつつ次々につなげていきながら文末から文頭に拡大する</p>	<p>T: 行きます → S: 行きます T: 学校へ → S: 学校へ行きます T: 友達と → S: 友達と学校へ行きます</p>
<p><応答練習> 質問と答えの形式になっている練習</p>	<p>T: 毎朝牛乳を飲みますか。はい S: はい、飲みます。 T: 毎朝パンを食べますか。いいえ。 S: いいえ、食べません。</p>

- <長所>
- ・短時間にたくさん練習ができる
 - ・発音の練習になる
 - ・媒介語なしで練習できる
 - ・一斉練習が可能

- ・一度教授スキルを獲得したら他の文法項目に応用可能
 - <短所>
 - ・同じ練習が長く続くとつまらない
 - ・集中力が必要
 - ・実際のコミュニケーションと直接結びつかない
 - <注意点>
 - ①形の正しさを重視する
 - ②不自然な文、あまり使わない文を練習しない
 - ③ 適度な変化と緊張感（テンポ、練習の種類や活動形態）
 - ④ コミュニケーションに役立つ練習と組み合わせる
 - ⑤ 4技能のバランスを考える
- ※子どもが対象であれば、ゲーム性を取り入れたり、様々な視聴覚教材・教具を用いたりすると、楽しく自然に何度も練習できる

(4) 練習方法：意味伝達（コミュニケーション）を重視した練習

○タスク活動：実際の場面に近い状況でのアウトプット練習

目的

情報差（話し手と聞き手の間の情報の差を埋める。インフォメーション・ギャップ）

選択権（自分で内容や表現形式を選んで話す）

反応（相手の反応を見ながら会話をすすめる）

- ロールプレイ
- シミュレーション
- プロジェクトワーク

(5) 聞くことを重視した練習（話すことを強制しない練習）

- 聞いて反応する
- タスク・リスニング

4. 教室活動での教師の役割

○フォーカス・オン・フォーム（言語形式への意識化）

意味やコミュニケーションに焦点を置いた授業の中で、学習者の注意を言語形式に向けさせる試み（例：リキャスト）

cf. フォーカス・オン・フォームズ（言語形式の重視）

フォーカス・オン・ミーニング（意味の重視）

○明示的文法知識

○スキャフォールディング

子どもや学習者が他者の助けがあれば解決できる課題を遂行する場合の、大人や教師、より能力が高い仲間からの支援。このような支援の効果を重視した授業活動にピア・レスポンス等の協働活動がある。 cf. ヴィゴツキーの最近接発達領域

○フィードバック

学習者のアウトプットに対して、何らかの反応を示すこと。訂正フィードバックをいかに行うかは、言語教育上の課題の一つ。

<誤りの原因>・学習者の母語の影響・誤ったルールの掲載・言い間違い

→自己修正の可否によって単なる言い間違いかそうでないかを判別可

<誤りの重要度>正確さ/適切さ

聞き手が話し手の意図と違う解釈をしてしまう可能性が高い誤用は重視

<誤りの訂正の仕方>

- ・誰が? : 学習者本人/その他の学習者/教師
- ・どのタイミングで? : 誤りの直後/活動が終了した時点
- ・どのような方法で? : 自己訂正の可否/活動の目的/実際の状況に鑑みて判断する

○リキャスト

- ・学習者が発した誤りに対し会話の流れをさえぎらずにそのエラーを正しい表現に言い換える口頭のエラー訂正
cf. 明示的訂正、明確化要求、メタ言語的修正、誘導、繰り返し
- ・言語習得のメカニズムから考えて効果的なフィードバックと考えられる

○日本語支援の5つの視点

言語操作に直接関わる支援「直接支援」: 理解支援、表現支援、記憶支援
学び方や環境整備に間接的に関わる支援「間接支援」: 自律支援、情意支援